

## 第08話：皇帝ゼウスの最初の妻 メティス

海馬が引く橇は、タロと赤ん坊を乗せて、寒さの中をひたすら走ります。雪原を走り抜け、雪山の道なき道をジグザグに登り、山頂まで着くと、今度は下り、幾つもの山を登り下りして、雪の冠を頂く山脈に近づきました。

ムーサイと別れて出発し、大分経った頃、橇のかなり上空に、鳥が浮かんで旋回し、タロ達を見張っているのが分かりました。時折、急降下し、低空飛行をするので、その際に様子を窺うと、なんと、橇を引く海馬と同じく首の周りだけ環状に白毛になっている頭が二つある双頭の鷲で、眼光鋭く、左右に眼を光らせ、嘴の鋭い鷲です。季節外れの迷い鳥か、それは南国にいるはずの冠鷲です。まだ昏い中で襟の白さが際立っています。海馬は同類と思ったのか、冠鷲が飛ぶ後を追って進みます。しばらく行くと、冠鷲は、突然、落下するように急降下しました。危ないと思ってタロが身をかわすと、その顔の正面には凍った河が見え、向こうの畔に、氷のお城が見えました。

海馬は、河を渡り、お城の門に近づきます。門の上には額が掲げられ、そこに『METIS』の文字が刻まれています。その城は、メティスが暮らしているお城でした。海馬が前肢で、門の扉を軽く蹴ると、扉はギーッと音を立てて開きました。城門の扉を守っているのは、途轍もなく大きい白熊で、タロ達を見ると、大きなしゃがれ声で喚き、顔を横に振って、部屋に入るよう、促しました。タロは、赤ん坊を包んだ布袋を抱え、櫓から降りました。部屋に入ると、物音一つしない薄暗がりです。目が暗さに慣れて来ると、そこは大広間で、正面に大きな椅子があり、奥の方に、大理石の暖炉が見えます。火は消えています。さすがに立派な部屋だ、と思っていると、静寂を破って、突然、奥からけたたましい音が聞こえました。暖炉の煙突の上から、激しく羽ばたく音が聞こえたかと思うと、その羽ばたく音は、暖炉の口の方に移り、暖炉から、何か飛び立ちました。それはなんとあの冠鷲です。翼を拡げて、鳥の影が大広間を横切ったかと思うと、翼を閉じて、大広間にデンと置かれた大きな椅子の肘掛けへと降り立ちました。

冠鷲は、嘴で羽根に舞い降りた煤を払い除けたかと思うと、何か考えている風に、目をぱちくりさせ、頭を左右に動かし、椅子の脇にあるバスケットまで飛び、小さな林檎を啜えて椅子の肘掛けに戻り、林檎を啄んでいます。タロは、手を額にかざして冠鷲をじっくりと眺めました。大きな椅子は玉座であり、そこに居たのは、もはや冠鷲ではなく、城主メティスそのものでした。

タロは、人差し指を唇と耳にあて、前に、ムネモシュネに聞いた通りに、指輪を作って、輪から眺めて見ました。

「メティス：『叡智』『思慮』『助言』の意味の知性の女神。ゼウスの最初の妻。アテネを守護する女神アテナの母神。ゼウスは、母神レアと妻メティスの助力を得て、父神クロノスが我が身への災厄を逃れるため飲み込んだゼウスの兄弟姉妹を吐き出させたことによって、困難な状況から抜け出すきっかけを得た。（ギリシャ神話）。」

タロは、セレネからムーサイまで経緯総てを話しました。そして、ムーサイからの伝言を記した巻物を渡しました。メティスは、巻物とタロの目を見て、溜息をつきました。

そして、タロの側で眠る赤ん坊の方を向き、そっと額に手を当ててから頷き、そして、お腹をそっと撫でました。メティスは、父神クロノスから逃れて牛飼いをしていた頃の若き日のゼウスの話、ゼウス自身も、後に、予言を信じて父神クロノスと同様に、我が身への災厄を逃れるために、蠅に変身した自分も飲み込んだ話、二人の子供であるアテナは、飲み込まれた母神メティスの中で育ち、ゼウスの頭部に移動した話、ゼウスの中でのメティスがアテナのため甲冑を作った話、この甲冑作りで、ゼウスは、激しい痛みを襲われ、その痛みを耐えかね、我が子の鍛冶屋の神へファイストスに斧で頭をたたき割るよう命じた話、その前に甲冑で完全武装した女神が飛び出し、それがアテナだった話などと、色々と話してくれました。数多くの困難を経てこそ、今の繁栄がある、と言えます。

「ゼウスは、父神クロノスが率いるティターンとの戦い（ティーターノマキアー）に勝ち、神々の頂点に立った。歴史を知ることは大事だ。でも、問題は、そこから何を学ぶかだ。これから先には、師と仰ぐものは出ないかも知れぬが、その姿から知り、学ぶことも多かるう。

「まず、私の後釜、ゼウスの妻の女神テミスのところへ。そして次に、我が娘の女神アテナを尋ねよ。ユニコーン探しは、息の長い話だね。この巻物に伝言を続けよう。」メティスは巻物に娘への伝言を書き、タロに戻しました。そして、白熊に、テミスのところへの案内を命じました。タロは、お辞儀をすると、赤ん坊を布袋に包んで、抱き上げて橇に乗りました。寒さの中で、待っていた海馬は、白い鼻息を立てながら、先に走り出した白熊を追いかけて、橇を引いて走り始めました。河沿いを走ると、河の氷の下で、水が動き始めたのか、ゴボゴボと音がしています。メティスはギリシャ語では『Μητις』です。

メティスの夜空の居城は、冠座です。

タロは気になって、ズボンのポケットの小さなノートを開くと、七頁目に文字が書いてあります。

「易経：上卦＝沢：下卦＝水：沢水困」四難の卦の一つ

「池涸渴して困窮甚だし：臥薪嘗胆」

夫ゼウスの数々の困難を救った妻、それがメティスです。

「地中で凍った泉が動き始める」そんな季節です。

それからどうなったでしょう？お話し、続きはまた明日！